

# 『黄帝内经』の「実」概念の意外な一面

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

虚実概念に関しては、昭和 49 年の『漢方の臨床』誌上での論争を始めとして、多くの論説が為されている。

中国医学、というか『黄帝内经』を医学理論の基本に置く立場としては、『素問』通評虚実論篇第二十八の「黄帝問うて曰く、何を虚実と謂うか。岐伯對えて曰く、邪氣盛んなるは則ち実、精氣奪するは則ち虚」を虚実概念の基本的な理論とすることが多い。

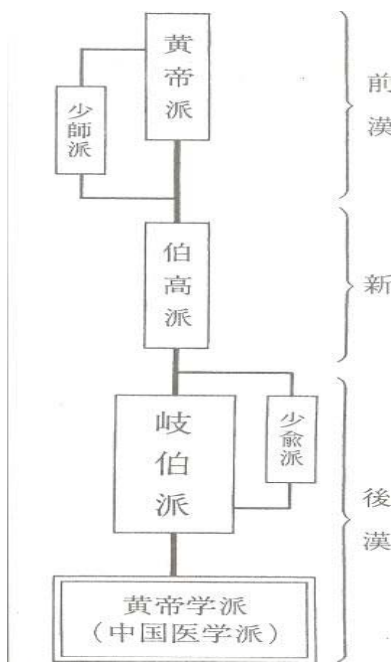
これに対し『黄帝内经』と切り離して『傷寒論』を考えることが多い日本漢方の一部の人たちにおいては、大塚・矢数・清水共著『漢方治療の実際』（南山堂、昭和 41 年刊）

の「虚とは、病に抵抗してゆく体力の虚乏している状態。実とは、病に抵抗する体力の充実している状態」を代表とする論が為されている。虚に関しては、まあ似ていると云えるので、問題は実概念にあるといえよう。

この度、現伝の『黄帝内经』の成立は黄帝派を始めとする種々の学派の理論が混在している書物であり、各篇の問答の組み合わせからその派が推測できるとする山田<sup>(1)</sup> (図) の考えを参考にして、虚・実・盛・衰などの字句が如何に変化していったかの分析を行った。この内容についてはいずれ発表するが、その課程で「実」概念に意外な面があったことを示す、非常に興味深い条文に出会ったので、ここに発表したい。

それは黄帝派に次いで現れた少師派の論文に見られる。その中の『靈枢』歳露論第七十九に、黄帝が「人が突然死んだり病気になったりするのは何故か？」という問いに対し、少師が答える場面に、「三虚が有る者はそうなります。三実が有る者は、邪が人を傷れないので、そうなりません」。さらに黄帝がその三虚とは何かを聞くと、少師は「年とともに衰え、それに乗じて、月の空しきに逢ったり、時の和を失ったりして、賊風に傷られるようになった状態を三虚と謂います。この三虚について知らないのは、名医とは言えません」と答える。さらに黄帝が三実とは何かを聞くと、少師は「年の盛んなるに逢い、月の満つるに遇い、時の和を得ることができれば、賊風や邪氣が有っても、何の心配もありません」と答えた。

この段を更に能く理解するには、この前の段の少師の答えを見る必要がある。「人と天地はお互いに影響し、日月とも感応する。故に月が満ちるときは、海水は西に盛んとなり、人は血氣も充分になり、肌肉も充実し、皮膚は緻密となり、毛髪は丈夫になり、腠理は閉じ、皮脂も充分に覆うため外邪の侵入を防げる。當にこのような時には、賊風に遇ったとしても、侵入は浅く深くに至らない。(これに対し) 月が欠ける時期になると、海水は東に盛んとなり、人は氣血虚し、其の衛氣は去り、外形は変わりなくても、肌肉は減り、皮



膚は縦（＝緩）み、腠理は開き、毛髪は残（＝浅）く、腠理は薄く、皮脂も薄い。當にこのような時に賊風に遇えば、邪の入ること深く、病状も急速に進行する。

ここに見られる「実」の概念は驚くべき内容である。虚の概念は賊風に傷られやすくなるという一般的概念の延長にあるのに対し、一般には病邪が実しているときに用いられる、悪しき意味合いとしての実概念とは大いに異なっている。それは日本漢方の一部が言う「体力充実状態」に近く、まさに賊風にも耐えられる充実ぶりを謂っているのである。

『黄帝内経』のなかで最も数多くの論文が残り、最後に登場したのは岐伯派であるが、その派の論文集のなかで、玉機眞藏論篇第十九に以下のような条文がある。「黄帝曰く、余は虚実が死生を決する基であると聞いた。是非その意味合いを教えて欲しい。岐伯曰く、五実<sup>ウ</sup>は死に、五虚も死にます。帝曰く、是非とも五実五虚とは何かを聞きたい。岐伯曰く、脉が盛んで、皮膚には熱感があり、腹は脹り、大小便が不調で、煩悶するような状態を五実と謂います。一方、脉は細く、悪寒がしやすく、氣が少く、下痢しやすく頻尿になり、食欲不振の状態を五虚と謂います。帝曰く、こういった状況でも生きながらえる者とは一体どんな人だろうか？岐伯曰く、漿いお粥でも胃に入ることができ、下痢頻尿が止まるようになれば、虚であってもそういう人は生き延びられるでしょう。上手く汗が出て、更に大便も好調になれば、実であった人も生きることができましょう。これが病候です。

ここに見られる「実」概念は、今風の病邪が実していることを意味しており、三実から五実（つまり少師派から岐伯派）へと段階を踏む過程で、実概念が変わったことが理解できるであろう。

『黄帝内経』と『傷寒論』の相関を基本的に認めない日本漢方の人々が、まさかこの『靈枢』歳露論篇の条文から、彼らの云う「実」概念を導入したとは考えられない以上、その理論根拠は奈辺にあったのであろうか？実概念が体力充実を意味して用いられるようになったのは、昭和もかなり経ってからのように思われるが、これまた興味深い問題ではある。

#### 【文献】

- 1, 山田慶児：中国医学の起源 p.376、岩波書店、1999年